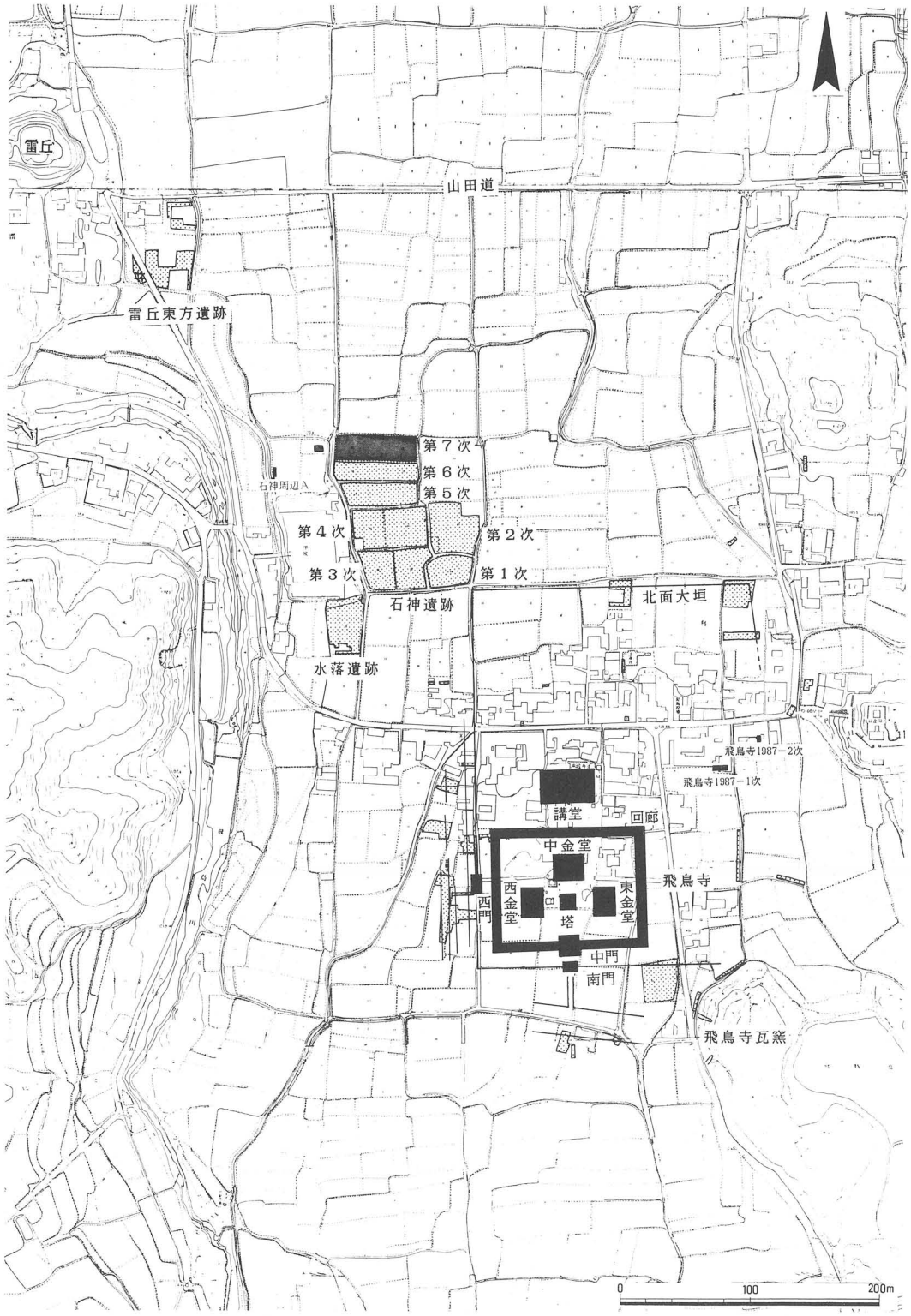
II　飛鳥地域の調査



第37図　石神遺跡周辺調査位置図

1. 石神遺跡第7次調査

（1987年8月～1988年2月）

1981年に開始した石神遺跡の調査も第7次をむかえた。今回は第6次調査区の北に接する水田に東西62m・南北18mの調査区を設けた。調査面積は約1000㎡で、これで第1次調査以来の総面積は約7800㎡となる。なお今回は戦前に調査され、その後露出保存されている石敷（飛鳥浄御原宮推定地）が調査区のすぐ西側にあたるため、これを西区として清掃と実測調査をあわせて実施した。その成果も合わせて報告する。

調査区の基本的な層序は、上から耕土、床土、二番床土、赤褐色土、褐色砂質土の順で、その下が遺構検出面となる。調査区東半では小石混じりの砂質土が、西半では黒褐色土の整地土が主として遺構面を形成し、自然地形にしたがって東から西へなだらかに下降する。調査区東西両端での比高差はこれまでに比べてあまりなく、約0.25～0.3mである。

A．遺　構

検出した遺構は7世紀前半から中世にかけての時期のものである。主な遺構は7世紀中頃から8世紀初頭にかけてのもので、遺構の重複関係や造営方位の違い、出土遺物などから、大きく4時期、A期（7世紀中頃：斉明朝）・B期（7世紀後半：天武朝）・C期（7世紀末：藤原宮期直前）・D期（7世紀末～8世紀初頭：藤原宮期）に分けられる。この区分は今回も変更しない。

A期　石神遺跡の南面に東西大垣SA600が作られ、飛鳥寺（崇峻元年＝588年創建）と水落遺跡（斉明6年＝660年設置の水時計）の北方に石神遺跡の広大な区画が形成された時期である。この時期の主要な遺構はほぼ真北に沿って造営されており、掘立柱建物5棟、石組溝8条、石敷などがある。掘立柱建物は柱を立てた後の整地によって掘形が覆われたものが多い。また抜取穴は掘形の中程までで止め、柱を上に引き抜いた後、黄色の山土で丁寧に埋め戻すという特色がある。

A期の遺構は、第4次調査区で検出した大規模な石敷をめぐらす井戸SE800から、北へのびる石組溝の変遷などを手がかりとして、これまで3期に細分してきた。しかし、今回、井戸から北流するとみられる石組溝をあらたに1条確認したので、これまでの時期細分を改め、従来のA—1期をA—2期、A—2期をA—3期とし、あらたに検出した石組溝にともなう遺構をA—1期とすることとした。ただしA期にはこれ以外の部分的な改修も認められ、時期細分に関しては今後も変更することがありうる。

A—1期の時期の遺構としては、今回あらたに検出した石組溝SD1210がある。SD1210は調査区のほぼ中央西寄りにある南北溝である。A—3期以降の石敷や柱穴が上層に存在するため、その一部を検出したにすぎないが、人頭大の川原石を3段以上積む内法幅約0.2〜0.3mの狭い石組溝で底石はない。側石の上半はA—2期の石組溝SD900を作る際に破壊されているが、その深さや幅から推定すると本来は暗渠であったと思われる。全長16m分を検出しさらに北へのび、南は井戸SE800に連なると思われる。

なおA—1期よりもさらに先行する遺構がある。南北廊SC820の東で検出した斜行大溝SD1240がそれで、長さ約7m分を確認しさらに南北へのびる。溝幅は約10mに復原できるが、東岸は3条の暗渠によって破壊されていて不明である。西岸の斜面裾には人頭大の川原石を1列並べ、その上に石を乱雑に敷く。埋土中に多量の炭化物を含み、飛鳥I段階の土器が出土した。

A—2期の遺構は井戸SE800から北にのびる石組溝SD900の掘削を時期区分の基準としている。SD900はA—1期の石組溝SD1210の東にある南北方向の暗渠で、井戸SE800から北にのびる排水溝の延長部でもある。掘形は幅約3mあり、両側に人頭大の川原石を積み重ねて溝としたもので、深さ1.2m、溝底での内法幅0.6m、底石はない。側石は上半部が抜き取られ2〜3段分が残り、蓋石はすべて抜き取られている。

A—3期はこの地域が最も整備された時期である。南面の東西大垣や井戸SE800周辺の建物は踏襲するものの、A—2期以前のその他の遺構をすべて廃し、大規模な整地の後に計画的な造営をおこなっている。なお、この整地後に

掘り込まれた土坑SK1150・1151・1152がある。SK1150は、南北約9.5m、東西約7m、深さ約1.5mの大規模なものであるが、これらの掘削の理由は不明である。これらを埋めたててA—3期の建物群が営まれる。

A—3期の遺構には、掘立柱の南北廊SC820、掘立柱建物SB980・990・1200・1300、石組溝SD790・890・1130・1185・1190・1260・1290、石敷SX1205・1230・1270がある。

南北廊SC820は高さ約0.3mの基壇を有する梁行1間（5m）の単廊で、桁行7間分（2.5m等間）を検出した。廊は南端で東西大垣に取りつくと推定できる。今回検出したのは大垣から北35～41間目に相当し、その総延長は101.5m以上となる。これまでの調査でその13間目から北へ29間分を確認したことになる。また截ち割り調査の結果、北39～40間目の柱筋から1.2m内側でやや小さな柱穴3個、SS1231を検出した。柱穴はいずれも梁行方向に柱筋を揃えており、基壇の築成途中に掘りこまれ、柱を切断後、再び基壇土を積んでいる点から、この柱穴は足場穴と考えられる。

従来の調査所見では、南北廊基壇の東西両縁には石組の雨落溝SD790・1080が存在する。しかし、今回はSD790が調査区南端にわずかに遺存するものの、SD1080は認められず、南北廊の西側に位置する掘立柱建物SB1300の造営に伴って完全に破壊されていることが判明した。

なお南北廊の基壇東斜面には焼土や炭化した屋根材が広範囲にひろがり、柱抜取穴にも焼けた壁土や焼土が認められたので、南北廊は焼失したことが今回明らかになった。

A—3期の遺構群は、この南北廊を境に東西に分けられる。東には南北棟SB980・990・1200と石組溝SD890が整然と並ぶ。

SB980・990は、前回調査で南半分を検出している同一規模の南北棟建物で、梁行2間・桁行16間以上の長大な規模をもつ。この2棟は第5次調査区で検出した桁行12間・梁行2間の東西棟建物SB860の両端に柱筋を揃えて建つ。これら3棟の建物は桁行・梁行ともに柱間寸法が2.1m等間で、隣棟間隔も柱間1間分とするなど整然とした配置をとり、東西幅25m、南北40m以上の南北に

第38図　石神遺跡第７次調査遺構配置図（１：300）

長い長方形の区画を形成している。なお、SB990の西側柱はA－2期の暗渠SD900の上半部を抜き取った後、浅い掘形を掘って柱を立てている。また南から11間目には間仕切りと思われるやや小さな柱穴がある。

前回調査では、この区画の南半にすっぽりとおさまる、桁行6間・梁行2間の東西棟建物SB1000を検出しているが、今回はその約3.5m北で、この区画の正殿にふさわしい大規模な南北棟建物SB1200を検出した。SB1200は桁行8間・梁行3間の身舎のまわりに四面庇をもつ総長19.2m×幅8.9m（面積170㎡）の建物で、中央に間仕切の柱穴を有する。

長方形区画の東辺を形成するSB980の東には、石組の雨落溝SD1130がある。溝底幅約1mで17.7m分を検出した。SB980の東側柱を立てた後、その柱掘形の東半を壊して西の側石を並べている。西の側石は東の側石より大きい石を用い、建物側は約0.3m基壇状に高くなる。SB990の西側でも同様の雨落溝の東側石と思われる石列SX1190がわずかに残り、西にも溝がめぐるものと思われる。したがって、SB860・980・990の3棟で囲まれた区画内全体が低い基壇状を呈していた可能性がある。

石組溝SD890は、南北廊SC820と、長方形区画の西辺を形成する建物SB990のほぼ中央に位置する南北方向の暗渠である。SB990の建物にともないA－2期の暗渠SD900の側石が廃され、これに替えてその西約5mに新設されたものである。掘形の幅は約1.6mあり、両岸に人頭大の川原石を積み重ね、深さ1m、内法幅は約0.4mである。蓋石はやや移動しているものの、南半に長径約1mの石が1個残る。ただし北半は溝内の堆積土の状況が異なり、あるいはこの部分は開渠であったとも考えられる。SD900・1210同様、底石はない。

SD890の東西には石敷SX1205・1230が部分的にではあるが遺存する。石敷面は暗渠に向って緩やかに傾斜しており、南半では暗渠の蓋石と面を揃えていたものとみられる。南北廊SC820と建物SB990の間の幅約11mは、本来、全面が石敷であって、暗渠SD890は井戸SE800からの排水とともに石敷周辺の雨水処理も兼ねていたのであろう。

石敷SX1205にともなう施設として、斜行する石組溝SD1185がある。平坦

な石を敷いて底石とし、側石１段を並べその上に蓋石を置く小規模な暗渠である。内法幅約0.4mで約５m分を検出したが、西はSD890に流入するものとみられる。東にさらにのびていたものと推定され、あるいはSB990の床下を貫通し、長方形区画内の排水を担っていた可能性も考えられる。

南北廊の西には建物SB1300とその南側にひろがる石敷SX1270、石組溝SD1260・1290などがある。

SB1300は桁行３間以上・梁行３間の身舎の東・南・西に庇がつく南北棟建物で、おそらく北にも庇を有する四面庇建物と思われる。柱間寸法は桁行2.5m等間・梁行1.8m等間・庇の出は２mである。柱掘形は長辺が1.5m以上ある長方形を呈するが、２段に掘りこんでいる例もある。東の側柱は前回検出したSB1100と同様に南北廊の西側柱から約３mしか離れていない位置にある。また、南北廊の西雨落溝SD1080を撤去してその上に石敷SX1270を設けていることなどから推定すると、SB1300の造営は南北廊より遅れるものとみられる。柱抜取穴には焼けた壁土や焼土が認められるため、南北廊と同時に焼失したものと考えられる。

石敷SX1270は後世の破壊が著しいが、前回検出したSB1100北方の石敷SX1105と一体のものと思われる。南庇の柱列に接して見切りの石列を東西に並べる。この石列には一抱えほどの大きな石を用い、その他の部分には人頭大の石を用いる。なおSX1270は今回実測調査した西方の石敷SX1310（飛鳥浄御原宮推定地）とも一連のものと思われる。

SX1310は発掘後長期間を経て、乱された部分もある。今回の調査の結果、斜めの見切りの石列があり、北を一段高くして大ぶりの石を置き、南半は小ぶりの石を敷いていることが明らかになった。南北廊の西側には全面的に石敷がひろがり、その間に四面庇建物が並んでいたものと推定される。

石敷SX1270は南に緩やかに傾斜し、見切りから６m南に斜行する石組溝SD1260がある。SD1260は底幅約0.2mの浅い石組溝で全長13m分を検出した。西端約２mは残りがよいが、東側は石がほとんど抜かれ底石と側石が一部残るだけである。SD1260西端の納め方は特殊で、石敷SX1270になじむように作

られているが、東半分は暗渠となって南北廊SC820を斜めに横断し、東雨落溝SD790に注いでいたようである。

調査区北端には東西石組溝SD1290がある。内法幅約0.3mで底に小ぶりの石を丁寧に敷き、側石1段を並べ、その上に蓋石を置く小規模な暗渠に復原できる。断続的に約10m分を検出した。西は調査区外へのびるが、東は南北廊の西雨落溝の抜取溝によって壊されている。またSB1300の柱穴によっても寸断されており、その造営に先行することは明らかである。SD1290は南北廊の建設とともに設けられ、東端は西雨落溝に合流していたと考えられる。

B期　A期の建物群は南北廊などの焼失を機に取り壊されたものと思われ、その後B期の建物群が建てられる。南面の東西大垣がやや南に位置をずらして作り替えられるとともに、総柱建物が整然と建ち並ぶ時期である。

B期の遺構には掘立柱建物5棟、掘立柱塀4条などがあり、柱掘形に黄色粘土の混じる特色がある。遺構の方位は北で東にやや振れる。重複関係から少なくとも2時期に分かれるようであるが、今回は1時期にまとめて報告する。

調査区東端には前回調査区から北へ続く南北塀SA986がある。今回7間分を確認し、これで12間分を検出したことになる。柱間寸法は2.6m等間である。D—1期の南北溝SD621より古く、掘形の上半が失われている。

SB1120はSA986の西にある桁行2間・梁行1間の小規模な南北棟建物で、南北に各1間の塀SA1121がとりつく。柱間寸法は桁行1.8m・梁行2.1mである。

南北塀SA1122はSB1120より新しく、3間分を検出した。東西に長い掘形内に2箇所の柱痕跡が認められる。柱間寸法は2m前後である。

調査区の中央やや西寄りにあるSB1220は前回調査区から続き、桁行8間・梁行2間の南北棟建物に復原できる。柱間寸法は桁行2.05m等間・梁行2.3m等間である。

SB1215はSB1220の北にある桁行2間以上・梁行2間の南北棟建物で、その南妻部分を検出した。柱間寸法は桁行2m・梁行1.7mである。

SB1250は調査区南西にある南北棟建物で、桁行4間以上・梁行2間である。柱間寸法は桁行1.8～2m・梁行2.1m等間である。

建物SB1295はSB1250の北にある南北棟と考えられる建物で、その南妻部分のみを検出した。しかし、調査区内では柱痕跡が認められず、建物ではない可能性もある。

C期　この時期の遺構には掘立柱塀SA751・1060、掘立柱建物SB140、素掘りの溝SD1165・1275がある。遺構の方位は北で西へわずかに振れる。掘形の大きさはA・B期にくらべて小ぶりになり、埋土には炭化物を含む。

SA751は、調査区東部にある柱間寸法約2.1mの南北塀で、D－2期の南北溝SD640の溝底で8間分を検出した。この塀は第4次調査区から北へのびており、これで総延長83m（39間分）を確認したことになる。

SA1060はSA751の西約31mにある南北塀で、10間分約18mを検出した。A期の南北廊基壇土上から掘り込んでいる。前回調査区でも6間分を検出しており、前回はB期としたが、今回の調査の結果、造営方位の振れがC期の遺構に近いので改めた。

SB1140は、塀SA751の東にある桁行4間（1.8～1.9m）・梁行2間（1.7m等間）の南北棟建物である。

素掘りの南北溝SD1165は調査区中央やや東寄りにあり、A期のSB990よりは新しく、D期の南北塀SA781よりは古い。溝幅約0.8mで深さ約0.3m、16m分を確認した。

素掘りの東西溝SD1275は調査区の西半にあり、溝幅約0.4m、深さ0.1mで全長約23m分を確認した。調査区西端で南に一旦折れ、また西にのびる。この屈曲部にのみ護岸の側石が残る。

D期　この時期の遺構には掘立柱塀2条、掘立柱建物1棟、南北方向の素掘り溝3条と多数の土坑群がある。遺構の方位は基本的には北で西に振れるが、わずかな差があり2時期に細分できる。柱穴・溝とも埋土に炭化物を含み、C期の遺構と酷似する。

D－1期の遺構には南北方向の溝SD621、掘立柱塀SA781・1175、掘立柱建物SB1180、石組井戸SE1170・1280と多数の土坑がある。

調査区東端にあるSD621は幅約2.5m・深さ約0.5～0.6mの素掘り溝で、全

長17m分を検出した。第3次調査区では南端を検出しており、その総延長は約92mとなる。

SA781はSD621から24m西を平行にのびる南北塀で、7間分を検出した。調査区北端で西に折れ、SA1175となる。西へ10間分続き、1間おいてさらに西に続く。柱間寸法は約2.5mである。SA781は第4次調査区でも西に折れることを確認しており、南北約70m・東西32m以上の範囲を区画していることが判明した。この区画内にSB1180と、SE1170・1280がある。なおこの区画はD—2期にも存在する。

SB1180は桁行3間・梁行2間の東西棟建物で、柱間寸法はばらつきが大きい。

SE1170はSB1180の北東にある円形の石組の井戸で、径0.8m、深さ1.8mである。現状ではあまり湧水はみられない。

SE1280は調査区北区にある円形の石組の井戸で、径0.8m、深さ2.3mである。現在もかなりの湧水がある。両者とも藤原宮期の遺物が少量出土した。

D—2期の遺構には素掘り溝SD640・1135と多数の土坑がある。

SD640は幅約2.5～3m、深さ0.5～0.8m、SD1135は幅約0.5～0.7m、深さ0.1～0.2mである。両者とも第3次調査区で東から北へ折れることが確認されており、これで南北総延長100mを検出したことになる。これら2条の溝は溝心心距離で7.5mあり、その規模に差はあるものの道路の両側溝と考えられる。この道路は第1次調査区で南へ折れることが確認されており、飛鳥寺寺域の西辺にそって、さらに南下するものとみられる。

D期以降の遺構　D期以降の遺構としては、竪穴状遺構SX1255・1256と多数の小溝群がある。SX1255・1256はいずれも一辺4m前後、深さ0.3m前後の浅い竪穴で、黄色粘土が充満している。底に井桁状に残る細い溝があり、あるいは上部構造に関係するものかと思われるが、その性格は不明である。なお、第6次調査区でも同様の遺構1箇所を検出している。

南北、東西方向に走る小溝群は、10世紀前半から14世紀にかけての土師器や瓦器を少量含み、平安時代から鎌倉時代にかけては、この地域が耕地として利用されていたことを示している。

B．遺　物

今回の調査でも土器を主体に、瓦・土製品・金属製品・石製品など多量の遺物が出土した。これらは現在整理中であり、ここではその概要を記しておく。

土器は各時期の土坑や整地土から出土した土師器・須恵器（飛鳥Ⅰ～Ⅴ段階）が大半を占めるが、特記すべきものとして東北地方の黒色土師器が数点ある。この他に縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器・土師器、中世の土師器・瓦器などがある。また瓦の出土量はきわめて少なく、軒丸瓦が2点出土したにすぎない。土製品としては土馬・土管などがある。

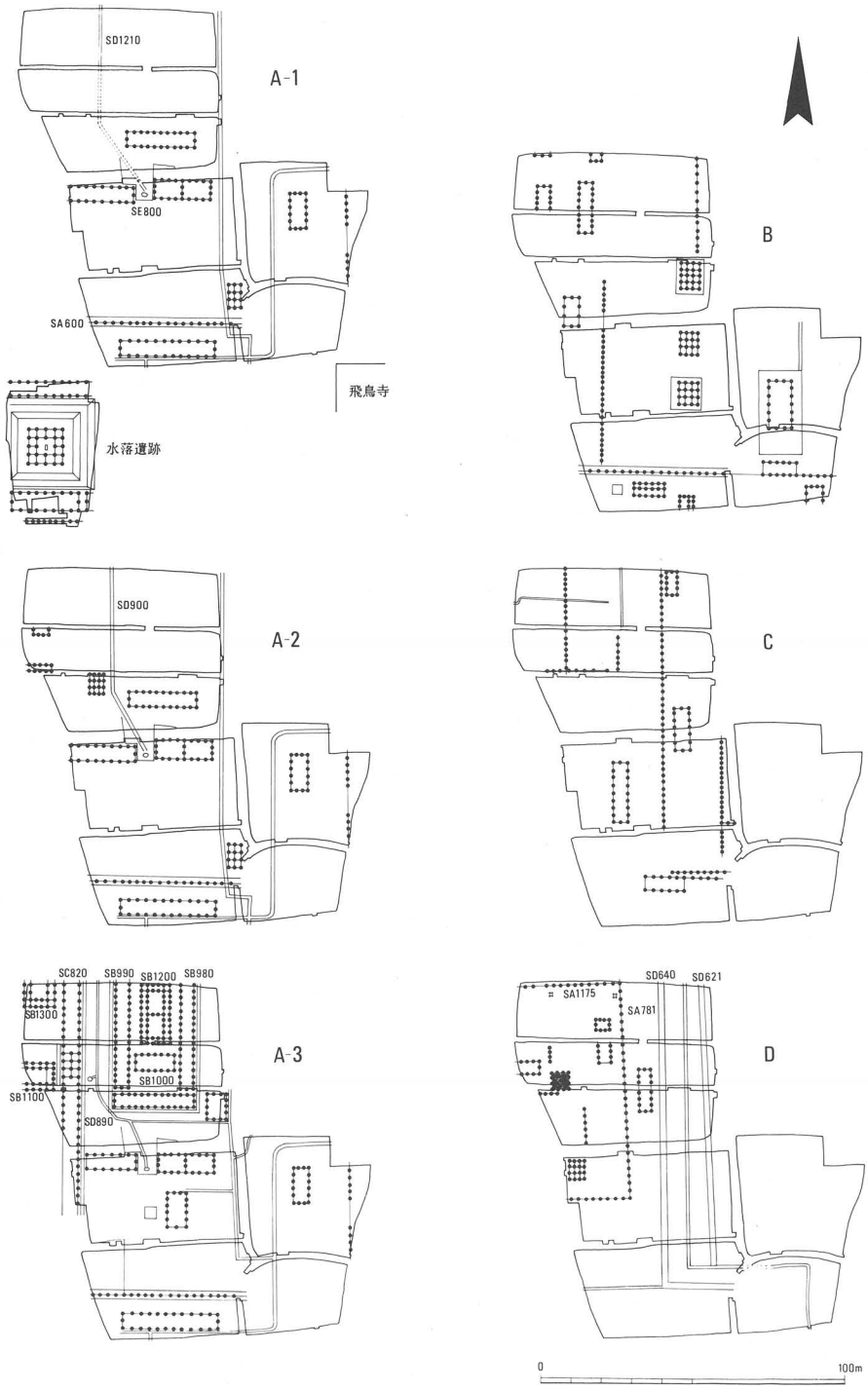
金属製品では、鉄製品が大多数で鏃・斧・刀子・鏨（たがね）・鋏（かすがい）・釘・鎌・紡錘車などがあるが、その出土量は第4・5次調査区に比して少なくなる傾向にある。この他に弥生時代の銅鏃がある。石製品には砥石や管玉のほか、縄文時代から弥生時代にかけての石鏃が出土している。

C．ま　と　め

7次にわたる調査で東西、南北とも最大120mの範囲を調査したことになり、遺構の分布状況がかなり明らかになってきた。今回の調査では7世紀中頃の遺構を多数確認するとともに、石神遺跡の性格とその変遷を知る上でいくつかの重要な知見が得られた。ここでは各時期の遺構について簡単にまとめておく。

A期　南に位置する飛鳥寺と水落遺跡との間を画す東西大垣の北は、南北廊によって大きく東西に分けられている。東の区画はその南部に石敷きが広がり、北には石敷をめぐらす井戸を中心に数棟の建物が連なる。さらにこの北方には長大な3棟の建物が回廊状に配され、狭長な空間を形づくっている。

今回の調査ではこの区画内で、四面に庇をもつ正殿と呼ぶにふさわしい建物SB1200の存在を確認できた。第6次調査ではSB1200の南で東西棟建物SB1000を検出しているが、これらの建物群はきわめて整然と、かつ軒を接するばかりに建てられており、他に例をみない特異な構造と配置をみせている。またこの建物群の縁辺は周囲より一段高く基壇状に整えられており、南北廊の東側の一画の中ではまさに中枢というにふさわしい区画といえよう。



第39図　石神遺跡主要遺構変遷図

また前回調査とあわせ、南北廊の西にも大規模な建物群が存在することを明らかにしえたのも、今回の大きな成果の一つといえよう。建物の周囲には広い石敷があってなお西方に続いており、この区画にも重要な施設が存在することは疑いない。南北廊を境としたその東西の区画は切り離すことのできない一連の施設ではあるが、建物の配置や構造などには大きな違いがみられる。それぞれの区画の用途は異なると考えられる。

このように東西大垣から北へ約100mまで調査が進み、重要な施設がなお続くことがわかってきた。これまでに明らかになった遺構の状況は、宮殿や官衙、あるいは居宅などとも異なる特殊なものであり、その性格について即断するのは困難である。このような建物配置の起源、史料との照合など、今後の調査の進展とともに十分な検討がまたれるところである。

また南北廊とその西の建物SB1300は、火災によって焼け落ちていることも確認できた。これを契機としてA期の施設は廃されたと考えられるが、これは一方では続くB期の遺構の性格を理解する上でも重要な知見といえよう。

B・C期　今回の調査区では、整然とした遺構の配置が明らかになったA期とくらべ、両時期の遺構は散在する傾向にあり、いまひとつまとまりを欠く。B期では第5次調査区以南で検出している総柱建物にかわり、南北塀や南北棟建物が数棟建つという形にかわる。C期も南北塀や小規模な建物が存在するだけで、その配置や性格については今後の調査の進展にまたれる点が多い。

D期　この時期の遺構に関しては、南北道路の西に展開する掘立柱塀による大きな区画と、内部に点在する建物・井戸・土坑などの施設が明らかになってきた。この時期の遺構の性格についても、出土遺物の検討の中からいずれはっきりとした答を出すことができよう。

このように石神遺跡ではわずか半世紀の間に、幾度もの造り替えや改修が繰り返されていたことが明らかになった。大がかりな改作の前後では遺構の状況が一変しており、この地域の性格、機能はめまぐるしく変化している。それだけに、ここが飛鳥の中でも重要な施設を設けるにふさわしい場であったのであろう。その意味で、今後の調査の進展が大いに期待されるのである。

2. 奥山久米寺の調査（1987―１次）

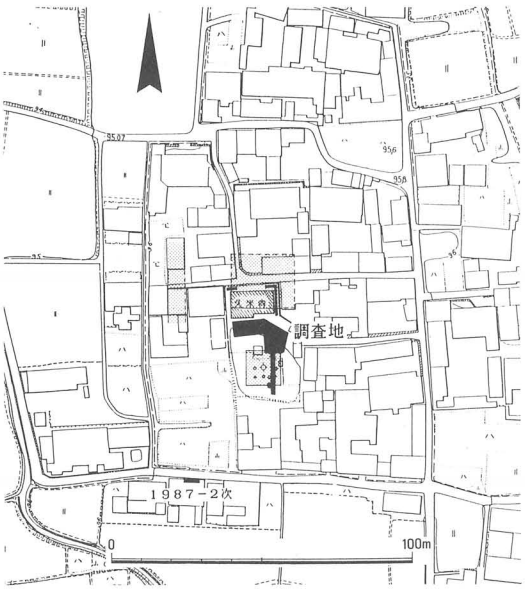
（1987年４月～７月）

この調査は奥山久米寺の庫裡改築計画に伴う事前調査である。塔跡と庫裡の間の約100㎡を調査し、併せて塔跡基壇と庫裡の東側と北側でトレンチ調査を行った。その結果、塔基壇とその周辺の状況、及び金堂の一部が判明した。

調査区は約0.45mの表土を除くと、約0.3mの厚さに瓦が堆積しており、その下が遺構面となる。

塔　塔の基壇外装は残っていないが基壇の掘込地業・地覆石抜取跡を検出し、一辺約12mの基壇であることが判明した。掘込地業は旧地表面から深さ約１mあり、版築による基壇土は旧地表面上0.65m分残っている。側通りの礎石はわずかに動いているものの、基壇土上にあり、概ね旧位置を保っている。基壇高は1.45mに復原できる。基壇外装は当初は地覆石に花崗岩を、羽目石等には凝灰岩を用いており、後に地覆石に花崗岩の川原石を用いて改修している。

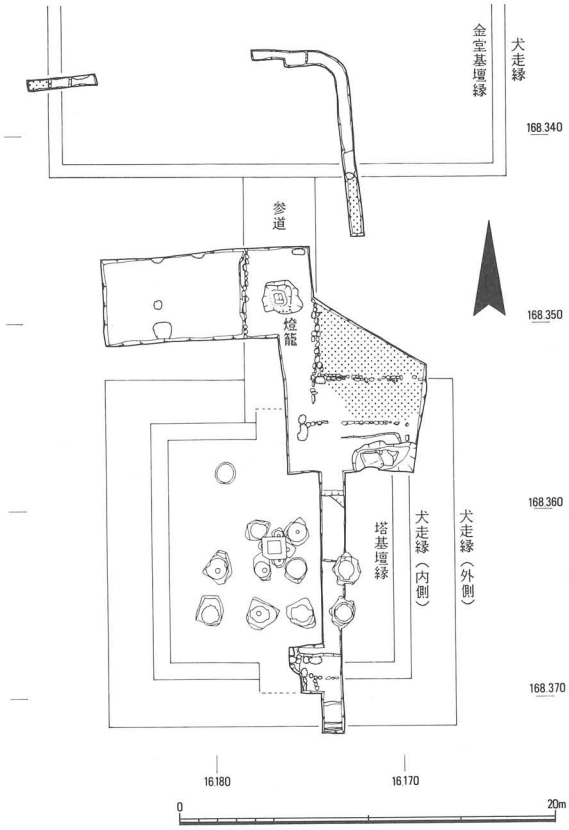
基壇上には礎石が10箇残り、方三間の平面に復原できる。柱間寸法は2.2m等間。なお、塔基壇東北隅にある近世の土坑中に塔東北隅の礎石が投棄されていた。心礎位置には鎌倉時代の十三重石塔が立ち、四天柱礎石は石塔を立てるために中央寄りへ移動している。四天柱の礎石には径0.8mの柱座を造り出し、側柱の礎石には径0.88mの柱座と地覆座を造り出す。地覆座は中央間のみ幅が広く0.6mで、両脇間は0.3mと狭い。中央間が扉構え、両脇間は壁としたものであろう。地覆座外周には径１mの造り出しがある。礎石上面を削り直しているのか、加工の工程差なのか決め難い。礎石３箇の中央に枘状



第40図　奥山久米寺周辺調査位置図

の穴があるが、後世にあけたものであろう。塔基壇の掘込地業よりやや北にずれて一段階古い掘込地業があり、塔北面階段部で北側へ広がっている。塔以前の別の建物のもの、地業の工程差の二様に考えられる。

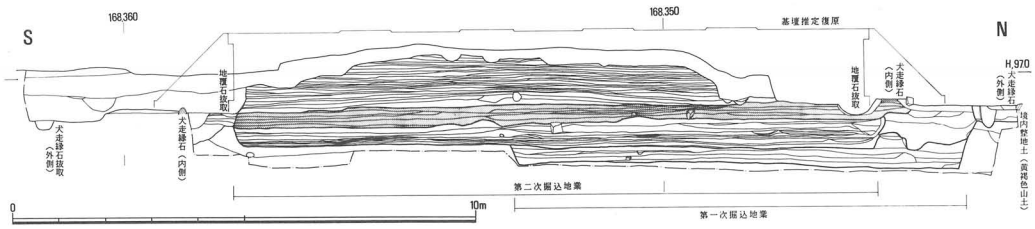
基壇周囲には人頭大の川原石列が２条廻る。共に基壇外側の犬走り状の壇の縁石である。一辺の長さは内側13.8m・外側18.5mであり、内側の石列より外方には瓦を敷きつめている。基壇南辺と北辺の中央部に階段の痕跡がある。北辺では地覆石の抜取り痕跡があり、南辺では地覆石と踏石の一部が残存するが、これらは当初のものではなく後補のものである。塔の基壇中に小礫を含んで固くしまった層があり、この中に瓦が多量に含まれていた。



第41図　奥山久米寺1987―１次調査
遺構配置図（１：400，網目は瓦敷部分）

参道と燈籠　塔北縁部内側の犬走りの北約１mから、3.5m間隔をおいて２条の石列が北へのびる。石列は花崗岩川原石を用い、並び方は不揃いである。石列間は塔と金堂をつなぐ参道とみられる。

参道上の塔基壇北縁から約0.75mに凝灰岩や花崗岩を詰めた直径1.5mの円形の穴がある。截ち割



第42図　塔基壇断面図（１：150，網目は瓦・小石の多い固く締まった層）

ると地表下約0.85mに榛原石の板石を据えて、柱状のものの抜取り痕跡がみとめられた。燈籠の竿もしくは幢支柱を据えた跡と考えられる。

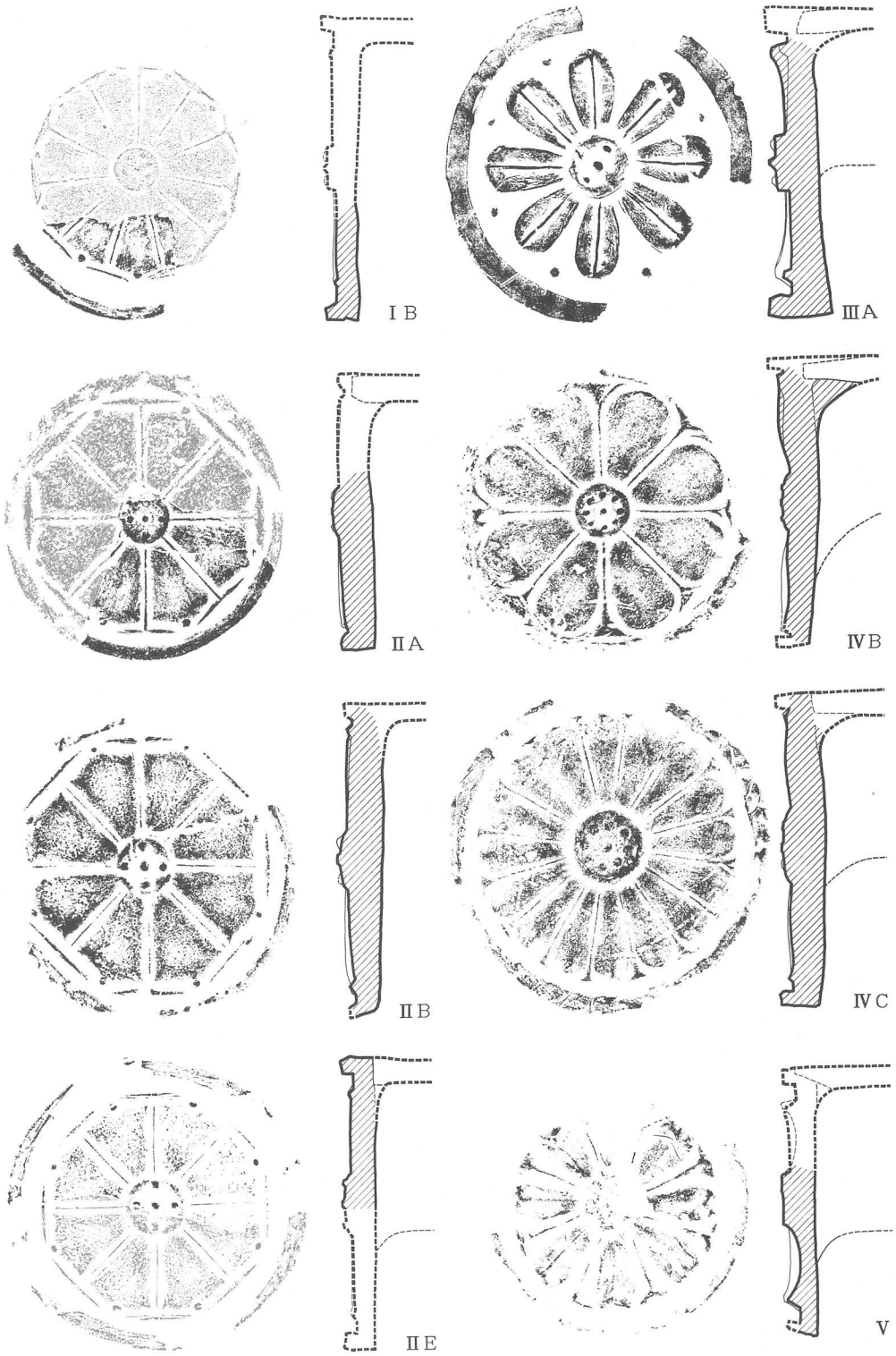
金堂　塔基壇北辺から北に13m隔てて金堂の基壇がある。基壇縁は南辺と西辺の一部を確認したのみで、いずれも花崗岩の川原石を一列に並べて基壇外装としている。これは当初のものではなく、その内側に当初の凝灰岩等を用いた外装の抜取り痕跡があり、塔と同様の改修を経ていることが知られる。

基壇の現存高は0.3m、掘込地業の深さは1.2mに及び、黄褐色の山土と暗褐色の粘土を用いて版築を施している。参道中軸を基準にすると、金堂基壇の東西幅は23mとなる。南北長は不明であるが、奥山久米寺北側の民家敷地内にも基壇土とみられる山土が広がっており、12m以上と推定できる。

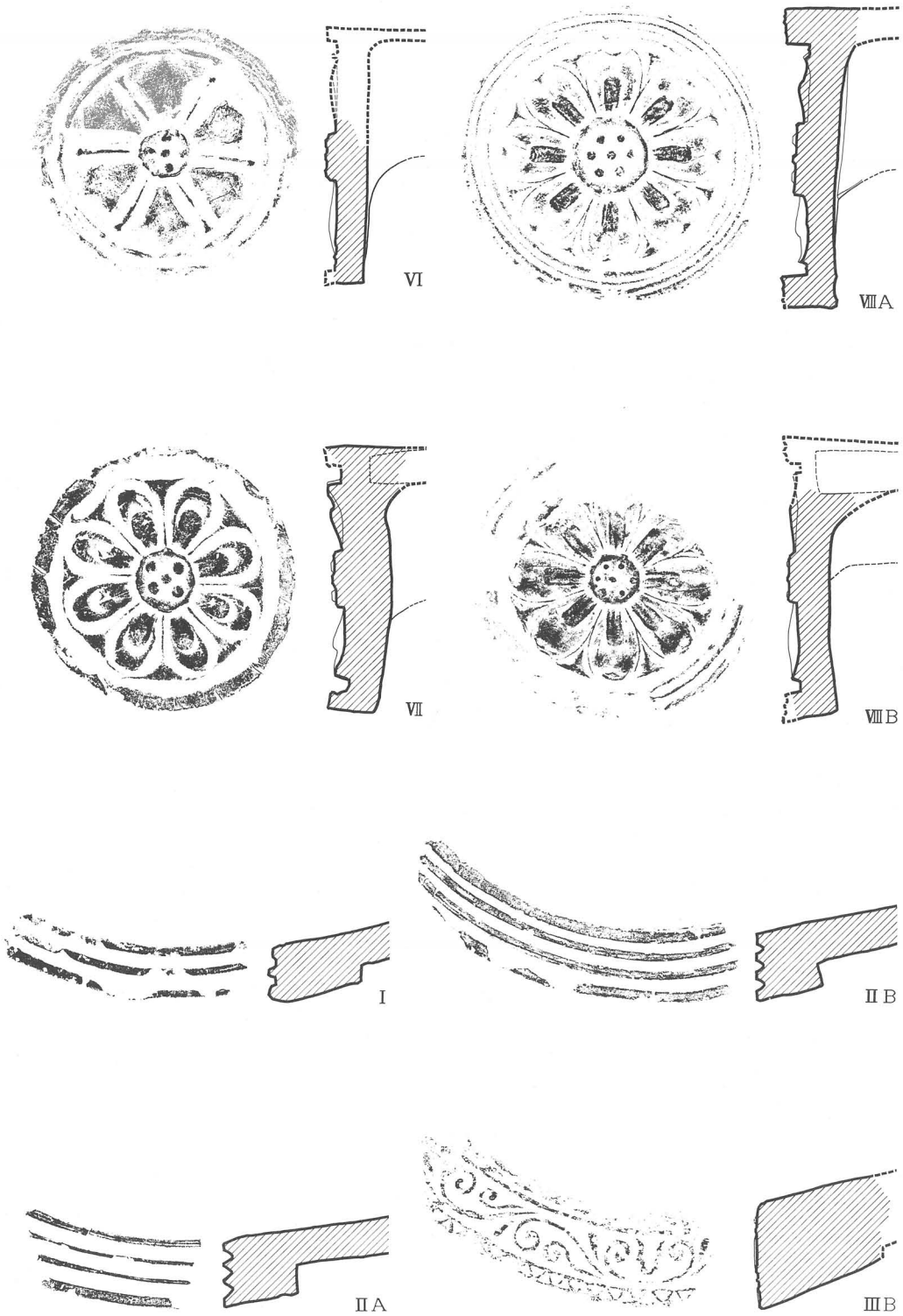
参道の西側で一部瓦敷を除いて掘り下げたところ、小穴5個を検出した。出土する土器から5世紀後半～6世紀前半の遺構と考えられる。

遺物　遺物は瓦・土器類が出土した。

軒丸瓦は12型式22種254点。ⅠB型式は飛鳥寺Ⅲ型式＝豊浦寺ⅡA型式の系譜下にあり、7世紀第1四半期にあてられる。Ⅱ型式は中房の大きさ、間弁の形等から6種に細分でき、Fを除く5種が出土。ⅡE型式は石神遺跡出土例と同笵。Ⅱ型式は瓦当と丸瓦を接合する際、丸瓦の筒部先端の凹凸両面を斜めに削って、瓦当裏面上端にくい込ませている。筒部先端に刻み目を入れる例は少ない。この接合手法は飛鳥寺Ⅰ・Ⅲ型式等に普遍的に見られる。Ⅲ型式は弁中央に凸線をあらわし、弁間に点珠をおく。突出した中房にA種では1＋4箇の、C種では1＋6箇の蓮子を配す。ⅣA型式は小片で中房を欠くが、弁端が小さく突出する。ⅣB型式では弁端の反転をあらわし、半球形の中房に1＋8箇の蓮子を配す。ⅣB型式は豊浦寺Ⅲ型式と同様に、7世紀第2四半期頃のものと考えられる。ⅣC型式の中房は半球形で1＋8箇の蓮子を配する。Ⅴ型式は弁端が反転し弁中央に稜をもつ。外区は素文で、瓦当裏面には他に類例がない、ハケメを施す。Ⅵ型式は間弁端に点珠をおく。Ⅶ型式は蓮弁に子葉を重ねており、愛知県小牧市篠岡2号窯跡出土例と同笵であるが、笵傷が小さいことから時期的に先行する。ⅧA型式は大きな中房に1＋6箇の蓮子を配し、弁の幅は



第43図　奥山久米寺出土軒瓦（1：4）



第44図　奥山久米寺出土軒瓦（1：4）

広く、長さは短い。弁の一部に笵傷がある。内区と外区の間には一条の圏線を、外区には三重圏線をめぐらす。ⅧB型式は、小ぶりの中房に1＋6箇の蓮子を配し、弁は細く長い。外区に三重圏線をめぐらす。Ⅷ型式は出土数全体の5割強を占め、出土地点は塔基壇付近に集中する。A・B2種共に山田寺式ではあるが、山田寺出土の瓦とは異笵である。ⅧA型式の瓦当部接合手法は、丸瓦筒部先端両面を斜めに削った後、平行あるいは斜格子状の刻み目を入れるものが多く、さらに筒部先端を数ケ所三角形に切り欠いて凹凸をつけている。この手法は山田寺所用瓦にはみられず、奥山久米寺所用瓦の中では大官大寺式の6231型式軒丸瓦にみられる。瓦当と丸瓦が取り付く位置は、ⅧA型式が瓦当上端に取り付くのに対し、6231型式では下がる傾向にある。従ってⅧA型式の年代は山田寺より後出で、大官大寺に先行する7世紀後半とみられる。Ⅸ型式は飛鳥寺XⅣ型式と同笵。X型式は大官大寺所用の6231型式と同笵でA・B・Cの3種出土した。Ⅺ型式は平城宮6285Aである。

軒平瓦は4型式7種86点ある。Ⅰ・Ⅱ型式は重弧文軒平瓦である。Ⅰ型式は段顎で、平瓦部凸面には格子叩き目の残るものがある。Ⅱ型式は出土総数の8割を占める。重弧文の形から3種に分類でき、いずれも段顎である。平瓦部凸

種別	型式	数	備考
軒丸瓦	ⅠB	1	角端点珠単弁11弁
	ⅡA	6	角端点珠単弁8弁
	ⅡB	15	
	ⅡC	4	
	ⅡD	16	
	ⅡE	8	
	ⅢA	2	単弁8弁　高句麗系
	ⅢC	2	
	Ⅲ	2	
	ⅣA	5	単弁8弁
	ⅣB	26	単弁8弁
	ⅣC	9	単弁16弁
	Ⅴ	1	単弁8弁
	Ⅵ	3	単弁6弁
	Ⅶ	2	単弁8弁
	ⅧA	124	山田寺式単弁8弁
	ⅧB	5	
	Ⅸ	13	複弁8弁　飛鳥寺XⅣ型式と同笵

種別	型式	数	備考
軒丸瓦	XA	2	大官大寺　6231A
	XB	1	大官大寺　6231B
	XC	1	大官大寺　6231C
	X	1	大官大寺　6231型式
	Ⅺ	1	平城宮　6285A
	Ⅻ	4	単弁　平安時代
	総数	254	
軒平瓦	Ⅰ	3	三重弧文
	ⅡA	61	四重弧文
	ⅡB	5	
	ⅡC	4	
	ⅢB・C	7	大官大寺　6661型式
	Ⅴ	6	均整唐草文　平安時代初期
	総数	86	
道具瓦	鬼瓦 A	3	角端点珠単弁8弁
	鬼瓦 B	3	山田寺式単弁8弁
	熨斗瓦	16	
	面戸瓦	5	
	雁振瓦	1	

第2表　出土瓦一覧

面は叩き目をスリケシているものが多い。凸面に朱線の残るものがある。Ⅲ型式は大官大寺所用の6661型式で、B・C 2種が出土している。

鬼瓦は従来より知られている2種が出土している。道具瓦の多くは胎土・焼成・製作技法等からみて大官大寺所用のものと同じである。この他に、「九〻八十一」と箆書きした平瓦や、絵を箆書きした丸瓦も出土している。

塔所用の瓦は出土点数と地点から、山田寺式軒丸瓦（ⅧA型式）と四重弧文軒平瓦（Ⅱ型式）の組合せとなる。また塔基壇版築土内の主として礫混じり層からは軒丸瓦ⅡC・ⅣA・ⅣC・Ⅵ型式と鬼瓦A及び、多量の丸・平瓦が出土した。いずれも7世紀前半に属するものである。

塔基壇土内からは7世紀後半の土器が出土している。

遺構の造営時期と伽藍　塔は山田寺式軒瓦を用いた7世紀後半の造営と考えられる。また塔基壇土中に7世紀前半の瓦が多く含まれることから古い掘込地業を用いて、軒丸瓦Ⅱ型式のいわゆる奥山久米寺式を含む瓦で葺いた7世紀前半の建物が前身に存在した可能性もある。塔周辺の瓦敷きには奈良から平安時代の瓦が含まれ、そのころ境内の整備が行われたとみられる。金堂については造営の年代を知る手がかりはない。参道の基壇は出土土器から7世紀後半の築造と考えられるが、それよりやや時期の降る可能性もある。燈籠の竿の掘方の掘削時期の決め手はないが、参道と同時と推定される。廃絶は抜取穴埋土中の土器からみて10世紀と考えられる。

従来の奥山久米寺周辺で行われた小規模な調査の成果をあわせると、奥山久米寺は第40図のような伽藍配置となる。塔・金堂が一列に並ぶ山田寺式もしくは四天王寺式の配置である。伽藍の中軸線から西面回廊内側までは約27m、金堂を山田寺程度の規模と仮定すると金堂・塔の心心距離は約27mとなる。この距離はいずれも高麗尺の750尺に当たり法隆寺若草伽藍とほぼ同じ規模で、山田寺と比べると回廊東西幅がやや狭いものになる。

今回検出した遺構は従来知られた奥山久米寺式軒丸瓦とは直接結び付くものではなく、今後前身の遺構及び金堂・講堂・門等、他の堂舎の解明が望まれる。

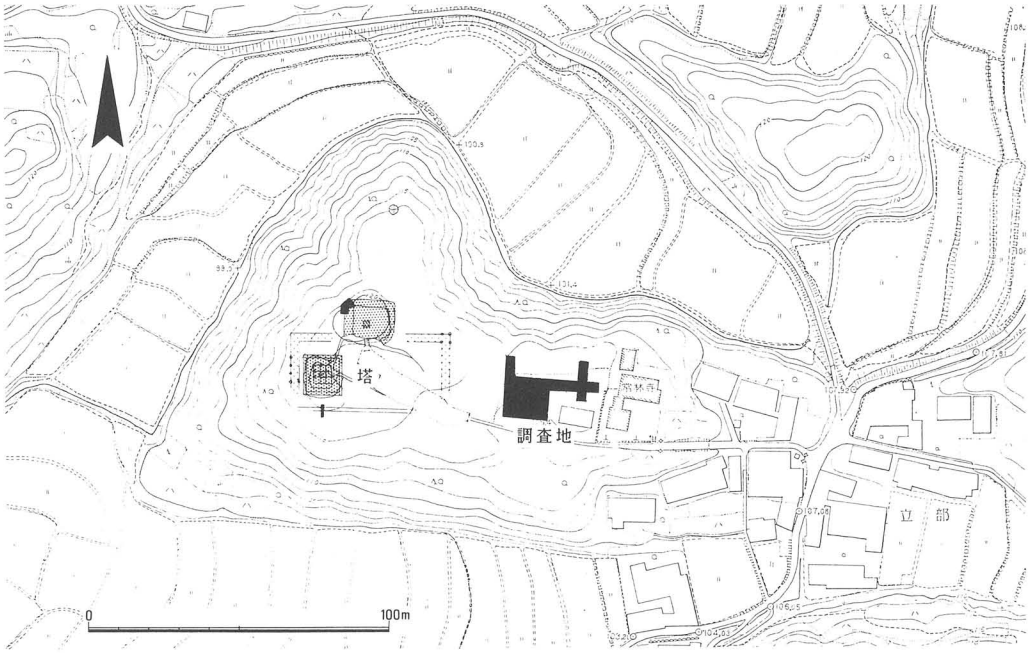
3. 定林寺第２次調査

（1987年１月～２月）

この調査は明日香村立部の史跡定林寺跡における、神社社殿建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は定林寺塔跡から東へ約50ｍ、現在の常林寺の西に接する地点で、定林寺に関連する遺構の検出が予測された。調査は当初、東西30ｍ・南北３ｍの調査区を設定し、その後に南側と北側に拡張区を設けて行った。

調査地の基本的な土層は、上から茶褐色土（畑耕土）・黄褐色土（地山）で、暗褐色土が調査区東半に限られてみとめられた。黄褐色質土（地山）は調査区の中央付近で高く、南と北で約0.5ｍ低くなり、調査区の南端と北端とでは急激に落ちている。調査地は全体に傾斜地であり、比較的平坦なのは南北約19.0ｍの範囲に限られる。

暗褐色土からは中世の土器が、土坑や溝からは近世の土器が出土しているが、定林寺に関連する遺構は一切検出できなかった。



第45図　定林寺周辺図

4. その他の調査概要

A. 山田道周辺の調査

（1987年３月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として、明日香村奥山で行ったものである。調査地は奥山久米寺の東南方約300ｍの地点で、飛鳥地域を東西に横断する古道、「山田道」の北に接する宅地である。

調査は「山田道」周辺の状況を確認するために、南北２ｍ・東西４ｍの調査区を設けて行った。検出した主な遺構は掘立柱塀と土坑である。塀は建物の可能性もあるが、柱間1.6ｍで東西１間分を確認することができた。柱穴は一辺0.5ｍ前後のものである。遺物はごく少量しか出土しなかったため、遺物からの時期判定はしかねる。しかし、遺構は黒褐色の整地土を切り込んでおり、周辺の石神遺跡での整地土のあり方とも類似しているために、７世紀代のものと考えられる。

B. 奥山久米寺周辺の調査

（1987年12月）

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、明日香村奥山で行ったものである。調査地は奥山久米寺の東方約200ｍの地点で、上ノ井手遺跡の西側に当たる。調査は上ノ井手遺跡の遺構の状況を確認するために、東西1.8ｍ・南北7.8ｍの調査区を設定して行った。調査区北側では、中世の遺物包含層である灰褐色粘質土を確認することができた。調査区南半では、この中世の遺物包含層を切り込んでいる、北東から南西方向へ流れる幅約５ｍ以上の自然流路を検出するにとどまった。

C．奥山久米寺の調査（1987－2次）

（1987年6月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として、明日香村奥山で行ったものである。調査地は奥山久米寺の塔跡の西南方約50mの地点であり、奥山久米寺の南面回廊推定地の南側に当たる。調査は東西10m・南北1.3mの調査区を設定して行った。現地表下約1mで黄褐色の地山面に至るが、顕著な遺構は検出できなかった。

D．川原寺周辺の調査

（1987年5月）

この調査は農地造成に伴う事前調査として、明日香村川原で行ったものである。調査地は川原寺の西方約400mの地点で、西に開ける谷地形の谷頭付近に当たる。調査は丘陵の裾部と、谷の中央部に調査区を設定して行った。谷中央部の調査区では、水田面下2.5mにまでおよぶ瓦器を含む中世の堆積層を確認した。丘陵裾部の調査区では、地山が谷中央に向かって低く傾斜する状況を確認し、地山面で幅0.7m、深さ0.2mの東西溝を検出した。溝からは平安時代初頭の土器・土馬が出土している。